

高等学校 文部科学省検定済教科書

【平成 25 教 内容解説資料】

文部科学省検定済教科書
高等学校 地理歴史(地理B)

130二宮 地B302

新指導要領準拠

新編 詳解地理

B



平成25年度用(2013年度) 内容解説資料

新しく詳しく解りやすく 大判地理B 登場

- ① 大判紙面(B5判)の活用
- ② 学びやすい配列
- ③ 地理的技能の習得と応用
- ④ 系統項目の内容充実
- ⑤ 地誌事例は世界全域掲載
- ⑥ 日本の特色と課題を探究

二宮書店

新編 詳解地理B

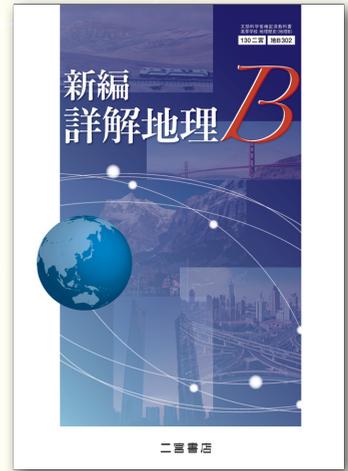
新しく詳しく解りやすく 大判地理B登場

—— ゆとり教育からの脱却

B5判・全カラー 326頁
図表552点・写真407点

シラバス・選定理由・
評価規準と方法の例 完備
→ p.12~14

準拠版教材：
新編詳解地理Bワークブック
→ p.15



■ 本書の特色 「自ら読んで理解できる教科書」に

① 大判紙面 (B5判) の活用

→ p.3,4,5

写真・図表・特設コラムの充実と欄外の活用で、資料性を大幅に向上しました。

② 学びやすい配列

→ p.3

地理的技能・系統地理・地誌事例に関連性をもたせ、相互に結びつき流れにのる展開になっています。

③ I編 地理的技能の習得と応用

→ p.10

図法・時差・主題図・地形図などの地理的技能(右表の**技能**)が確実に定着し、応用できるよう構成しました。

④ II編 系統項目の内容充実

→ p.6,7

系統項目の全分野を幅広くおさえ、さらに「世界の中の日本」(**日本**)の特設コラムで深化を図りました。

⑤ III編 地誌事例は世界全域掲載

→ p.8,9

全13事例で世界全域をカバーし、「地球的課題」(**課題** 12事例)と「地域をみる」(**地域** 6事例)も設定しています。

⑥ 最終章 日本の特色と課題を探究

→ p.11

地理の全学習を活かした地球規模の視点で日本の特色と課題を考察し、あるべき国土像を探究しています。

◎ 執筆者
筑波大学名誉教授
筑波大学名誉教授
筑波大学教授
大東文化大学准教授
立正大学教授
成蹊大学教授
首都大学東京教授

山本 正三
石井 英也
手塚 章
青木 久
内山 幸久
小田 宏信
菊地 俊夫

お茶の水女子大学附属高等学校教諭 菊池 美千世
筑波大学教授 呉羽 正昭
筑波大学教授 中西 僚太郎
首都大学東京准教授 松山 洋
長野県立長野吉田高等学校教諭 宮原 弘匡
東京都立西高等学校教諭 矢島 舜孝
日本大学教授 山川 修治

教科書 p.65 掲載写真 サバナの乾季(左)と雨季(右)の景観



学びやすい配列

資料で本文を充実、豊富な特設コラム

■ 内容構成と特設コラム

地理的技能を習得し（Ⅰ編）、後に続く世界を大観する系統地理（Ⅱ編）と、具体的な事例から学ぶ地誌事例（Ⅲ編）を参照しあえるように相互に結びつけ、流れのつた授業展開が可能。

編	章・節	特設コラム	頁
第Ⅰ編 地図と地理的技能	第1章 地理情報と地図		16
	1節 世界観の変化と地図		6
	2節 地球儀と世界地図	技能 時差, 世界地図	6
	3節 地理情報の地図化	技能 階級区分図	4
	第2章 地図と地域調査		7
	1節 地図の活用	技能 地形図の読み方	2
	2節 身近な地域調査		5
第Ⅱ編 現代世界の系統地理的考察	第1章 自然環境		54
	1節 地形	技能 地形図を読む 日本 地形と災害	20
	2節 気候		8
	3節 自然と生活	技能 雨温図とハイサーグラフ 日本 気候	18
	4節 自然環境に関する諸問題		8
	第2章 資源と産業		52
	1節 農林水産業	日本 農林水産業	16
	2節 資源・エネルギー	日本 資源・エネルギー問題	10
	3節 工業	日本 グローバル化の工業	14
	4節 流通と消費	日本 観光	12
	第3章 人口と村落・都市		24
	1節 人口	日本 人口問題	10
	2節 村落・都市	技能 村落の形態を読む 日本 村落・都市の課題	14
	第4章 生活文化と民族・宗教		19
	1節 衣食住		6
	2節 言語と宗教		4
3節 民族と国家	日本 領域と領土問題	9	
第Ⅲ編 現代世界の地誌的考察	第1章 現代世界の地域区分		4
	第2章 現代世界の諸地域		122
	1節 中国—発展する大国に着目	地域 香港・台湾・モンゴル 課題 環境問題	12
	2節 韓国—近隣諸国との関連に着目	課題 人口と食料・資源確保	8
	3節 東南アジア—項目ごとに整理	課題 都市問題	12
	4節 インド—巨大な人口に着目	地域 南アジア 課題 居住・都市問題・貧困	10
	5節 西アジア・中央アジア—項目ごとに整理	課題 紛争	8
	6節 アフリカ—項目ごとに整理	課題 人口急増と食料問題	10
	7節 EU—地域の統合に着目	課題 高齢化社会	14
	8節 ドイツとポーランド—国を比較	課題 民族問題	4
	9節 ロシア—体制転換後の社会と経済に着目	課題 環境問題	8
	10節 アメリカ—項目ごとに整理	地域 NAFTA 課題 居住・都市問題	14
	11節 ブラジル—地域開発と経済発展に着目	地域 ラテンアメリカ農牧業 課題 熱帯林破壊	10
	12節 オーストラリアとカナダ—国を比較	地域 ニューゼaland, オセアニア 課題 塩類化, 酸性雨	12
	第3章 現代世界と日本		10
1節 世界の中の日本		4	
2節 持続可能な社会に向けて	技能 課題解決の探究手順	6	

大判化による資料性の向上

ポイント

- ① 紙面をこれまでの A5 判から B5 判に拡大。
- ② 写真・図表・特設コラム・ことばの整理などを盛り込み資料性の向上を図る。
- ③ 欄外も活用し、視覚的にもわかりやすく学習できるよう構成。
- ④ 資料集にたよらず、教科書の学習でしっかりと理解できるよう情報量を充実。
- ⑤ 新しいテーマの統計や主題図を増やし、刻々と変化する国際情勢を捉える。

紙面の大判化で内容を充実 ▶▶▶ 写真・図表・特設コラムを充実し資料性を向上

● 作業・問いかけ

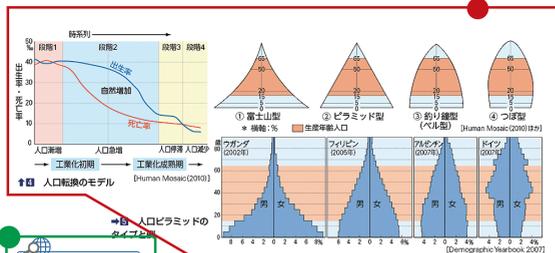
本文をさらに調べたり、考えをまとめたりして、自ら考察できる力を養う。

● 模式図で理解の深化

人口転換や人口ピラミッドなどは、実データとともに模式図を掲載。地誌の「人口問題」の学習と連携。

● いきいきと地域を映す写真

世界の自然や産業、社会、その土地の人々をいきいきと映し出す写真を掲載。



人口転換に合わせて、人口ピラミッドの形の変化を予測してみよう。

年少人口と老年人口を合わせた人口を従属人口という。生産年齢人口に分類されると考えられる人口である。また、性別別年齢別の人口構成のほか、産業別の人口構成は、三角グラフで表現されることが多い(→p.131)。

● 合計特殊出生率 15歳から49歳までの各年齢の出生率をたしあわせ、1人の女性が一生に生む子どもの数の平均を求めたものをいう。

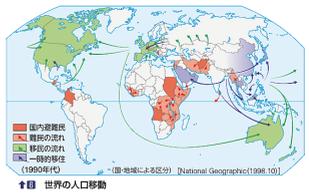
● ことばの整理
静止人口と人口置換水準
出生率と死亡率がほぼつり合い、人口の増減のない状態である静止人口になるための合計特殊出生率を、人口置換水準という。この値は死亡率に左右されるため、国・地域によって異なる。日本では2.07である。

人口構成と人口ピラミッド
人口構成を年齢別と性別に分けてグラフ化したものを、人口ピラミッドという。人口は年齢によって、0～14歳の年少人口(幼年人口)、15～64歳の生産年齢人口、65歳以上の老年人口に三区分別される。人口ピラミッドは、現在の人口構成の特徴を示すだけでなく、過去の人口現象や将来の人口構成も示唆している。

人口増加と人口転換
人類の歴史のほとんどは高出生率・高死亡率の多産多死型で、人口増加はきわめてゆるやかであったため、人口ピラミッドは富士山型を示す。産業革命以降は急速に死亡率は低下したが、出生率の低下は遅れて生じるため多産多死となり、人口は急増した。そのため人口ピラミッドは、ピラミッド型(底辺がせまく又の高い富士山型)に変化する。その後、出生率の低下が始まると少産少死となり、人口が増えも減りもしない静止人口に至り、人口ピラミッドは釣り鐘型(バレル型)になる。この一連の変化を人口転換または人口革命という。さらに超低出生といわれるほどの出生率の低下が続くと、自然増加率がマイナスとなり、人口ピラミッドはつぼ型に変化する。このような人口転換は、これまでの先進国の自然増加の推移を類型化したものであるが、他地域にも当てはめることができる。アジアNIEs(新興工業経済地域)の出生率は経済成長とともに急速に低下して人口転換を遂げ、日本と同程度かそれを上回る低出生となっている。

合計特殊出生率
1人の女性が一生の間に生むとされる子どもの数を、合計特殊出生率という。静止人口となる合計特殊出生率を人口置換水準^①といい、先進国では一般的におよそ2.1とされるが、現在、多くの先進国の合計特殊出生率はこれを下回り、人口減少が心配されている。発展途上国の合計特殊出生率も人口爆発といわれた1950年代の約6から、50年間で半分の約3まで低下してきている。

人口移動と社会増加
人口増加は自然増加(出生数と死亡数の差)と社会増加(流入数と流出数の差)の和で示される。社会増加は人口移動によって生じる。人口の移動は、移動の範囲によって国内移動と国際移動とに分けられるが、交通・通信の発達と経済格差の拡大によって、国際移動が活発になっている。



● ポイント解説 生まれた土地を離れる人々

人口移動の原因・動機はさまざまである。経済的成功を求めて自発的に移動するケースが多いが、政治的・宗教的迫害から逃れるためにやむをえず移動する場合や、気候などのように強制的に移動させられた場合もある。

南北のアメリカ大陸には、世界各地から移動してきた人々や、その子孫が多く住んでいる。清教徒やユダヤ人は迫害を逃れて移住した例であり、黒人はアフリカから奴隷として強制的に運ばれてきた例である。日本人は経済的な理由などで渡った人々の子孫である。

経済的な理由で移動した例としては、中国南部の広東省や福建省などから世界各地に移住した華人があり、世界各地に中華街(チャイナタウン)がみられる。また、南アフリカ共和国やマレーシア、フィジーなどのイギリスの植民地だった地域には、インドからの移住者が多くみられる。交通・通信が発達した現代では、人々は高賃金で求人の多い地域を求めて、国境をこえて移動する。第2次世界大戦後の復興期にはヨーロッパ、石油価格が高騰すると西アジアの産油国へ、さらにバブル景気の時期には日本へと労働者が流入した。

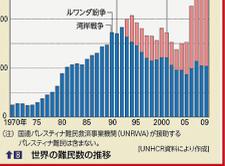
一方、国家間の戦争や内乱を避けて近隣諸国に逃れ、難民となる人々もいる。パレスチナ難民や、アフガニスタン難民、スーダンの国内避難民^②など、アジア、アフリカに多く発生している。さらに、気候変動や乱開発による環境の悪化も、人々が生まれ育った土地を離れる原因になっている。こうした環境悪化で移動しなければならなくなった人々を環境難民とよんでいる。

● 清教徒(ピューリタン) イギリス国教会の信仰と慣行に反対し、厳格した宗教改革を推進したプロテスタント諸教派の総称である。イギリスでの弾圧を受け、信仰の自由を求めてメソポタミアでアメリカに渡り、ニューイングランドに移住したピルグリムファーザーズはその一環である。

● 国内避難民 他国に逃れる難民に対して、国境をこえて国内の安全な地域に移動する場合は、国内避難民といわれる。



● インド系にもまれるマレーシアの人々(2000年撮影)



● 世界の難民数の推移(2000年現在)

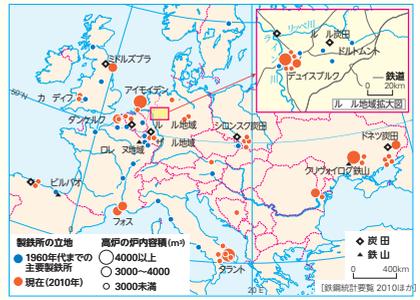
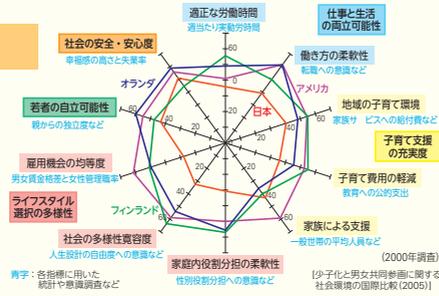
● ことばの整理
重要な地理用語のうち混同しやすい類似・対照的なものの定義を整理。

全50点▶

- 等角コースと大圏コース ○三角点と水準点 ○褶曲と断層 ○環太平洋造山帯とアルプス=ヒマラヤ造山帯 ○楕状地と卓状地 ○V字谷とU字谷 ○海食台と波食棚 ○砂州と砂嘴 ○高緯度と低緯度 ○日較差と年較差 ○寒気団と暖気団 ○植生と植生型 ○地衣類と蘚苔類 ○ラトソルとラテライト ○テラロージャとテラロツサ ○熱帯雨林と熱帯季節林 ○サバナ気候の雨季と乾季 ○氷河と氷床 ○土地生産性と労働生産性 ○嗜好品と工藝作物 ○水産養殖業と栽培漁業 ○主業農家と副業的農家 ○遠洋漁業と沖合漁業 ○原料と燃料 ○精製と精練 ○オイルサンドとオイルシェール ○輸入代替工業化政策と輸出指向工業化政策 ○非正規雇用と間接雇用 ○南北問題と南南問題 ○FTAとEPA ○直接投資と間接投資 ○最寄り品と買い回り品 ○静止人口と人口置換水準 ○大都市圏と世界都市 ○昼間人口と夜間人口 ○スラムとストリートチルドレン ○ヤムイモ・タロイモ・キャッサバ ○中国料理とイタリア料理 ○公用語・母語・共通語 ○上座仏教と大乘仏教 ○自然的国境と人為的国境 ○華人と華僑 ○油ヤシとココヤシ ○スンナ派とシーア派 ○シベリア鉄道とパム鉄道 ○ネイティブアメリカとインディアン ○春小麦と冬小麦 ○サンベルトとスノーベルト ○人種のつぼとサラダボウル ○大陸横断鉄道と大陸縦断鉄道

多彩な主題図 ▶▶▶

新テーマの図版例
おもな国の社会環境指標の比較
ヨーロッパの主要製鉄所の分布



欄外の有効活用 ▶▶▶ 最新統計や用語解説, 写真, ポイント補説など, 資料がさらに充実

● 用語解説・参考用注記

用語解説では、おさえておきたい重要な地理用語を解説。参考用注記では、本文を補足し知識を広げられるよう解説。

● 最新統計の充実

変化の激しい国際社会の実情をあらわす最新統計を掲載。世界的視野や地域からの視点で、現状をリアルに解説。

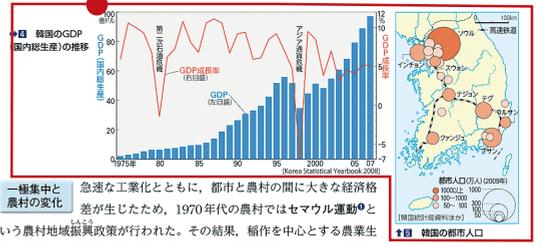


3 アジアNIEsから先進国へ

- 漢江の奇跡 韓国の経済成長を遂げる。ソウル市内を流れる漢江にちなんで名づけられた。
- オナー企業 創業後もしくはその一旗が経歴の実績をもつ企業をいう。

急速な工業化と経済成長
1960年代後半以降、韓国では工業化による経済成長が著しく、1970年代の発展は「漢江の奇跡」とよばれた。その結果、台湾などとともにアジアNIEsとよばれる新興工業経済地域の一つにあげられるようになった。鉱産資源が少ない韓国では、原料を輸入し加工品を輸出する輸出指向型の工業化が行われた。当初は繊維産業などの軽工業が発達したが、のちには鉄鋼や造船業などの重工業におよんだ。特に造船が盛んで竣工量は世界一となっている。1990年代以降は、自動車や電子機器などの工業も著しく発達し、ヨーロッパやアメリカ、日本などの企業に匹敵する世界的企業も生まれている。人口は日本の約半分という市場規模の小ささから企業の輸出志向は強く、またオナー企業が多いことを背景に経営革新の早さが成長を支えている。その結果、韓国はもはや新興工業経済地域というよりも先進国というべき国に成長し、1996年にはOECD(経済協力開発機構)の加盟国となり、発展途上国への経済援助も行っている。

工業地域の形成
韓国では、次のような地域で工業が発達している(図4)。ソウルとインチョン(仁川)周辺では自動車工業や電気・電子工業、繊維工業が盛んである。南東沿岸のポハン(浦項)には、日本の資本や技術援助によるアジア最大規模の製鉄所がある。ウルサン(蔚山)には世界有数の造船所があるほか、石油化学工業も盛んで、韓国最大の自動車メーカーの生産拠点でもあり、関連産業が集まっている。これらの都市は、古くからの工業都市であるプサン(釜山)とともに、臨海型工業地域となっている。また、高速道路の整備に伴って内陸部でも工業団地の建設が進み、クミ(亀尾)は電子機器製造の大拠点となっている。



一極集中と農村の変化
急激な工業化とともに、都市と農村の間に大きな経済格差が生じたため、1970年代の農村ではセマウル運動という農村地域振興政策が行われた。その結果、稲作を中心とする農業生産が増加して食料自給率が高まるとともに、農村家庭は近代化し道路が整備されて、農村景観は大きく変化した。一方、1970年代には農村人口が都市へ流出し、ソウルへの人口の一極集中が進んだ。同時に農村では、借地が農地の約4~5割を占める借地経営が進んだが、日本とは異なり農家の兼業化はあまり進まず、専業農家が全体の約7割を占める。これは、韓国の農村は他産業への就業機会が日本に比べて少なかったためである。また、日本と同じく農家の高齢化が大きな問題となっている。貿易自由化を進める韓国では、米以外の農産物の輸入自由化が進んでおり、中国産などの農産物の輸入によって経営がきびしくなった農家への所得補償も行われている。一方、トマトやキュウリ、ハクサイ、豚肉などの日本への輸出が増え、輸出向けの生産は増加している。



第Ⅲ編 2章 第2節 韓国 ◀地誌のページ

- 日本を測った人 ○古期造山帯とプレートテクトニクス ○世界の地震災害と火山災害 ○侵食輪廻 ○関東平野の地形
- 自然災害 ○世界の局地風 ○海洋の大循環 ○湖沼の変遷 ○気候区分の判定 ○世界の熱帯低気圧 ○偏西風とジェット気流 ○高山気候(H) ○冷帯の気候区分 ○フェーン現象 ○フロング止への動き ○森の恵みと海との関係
- ヒートアイランド都市型水害 ○エルニーニョ現象とラニーニャ現象 ○野菜の流通 ○茶の生産 ○日本の食生活の変化と課題 ○福島第一原子力発電所の事故と原子力発電の今後 ○ヘンリー=フォードがつくった大量生産方式
- 地域発展の二つのモデルーシリコンヴァレーとサードイタリー ○海外に進出する日本企業 ○アメリカと日本の消費生活 ○地球が養える人口は? ○生まれた土地を離れる人々 ○子育て支援で人口が増加した町ー静岡県長泉町
- さまざまな規模の都市分布と都市システム ○人種の意味 ○中国の少数民族問題 ○地域区分の単位地域 ○地域区分の規模と種類 ○時代により異なる地域区分 ○中国の地域区分 ○ソウルの都市問題 ○インドネシアの国民統合政策 ○養殖漁業の発展とマングローブの破壊 ○パルカン半島の民族紛争 ○アメリカの自然災害 ○パイオエタノール ○ラテンアメリカの地下資源 ○サンパウロとリオデジャネイロ ○オーストラリアとカナダの多文化社会

● **ポイント補説**
本文をさらに深めたいテーマ、最新事情などを取り上げ、本文を補説。

◀全46テーマ



ポイント

- ① 従来の指導要領にあった項目の制限(歯止め規制)の撤廃により、系統項目を幅広く扱う。
- ② 世界的視野から環境の多様性や国際情勢を捉え、現代社会の抱える地球的課題の解決を担う力を養成。
- ③ 情報化の進展や国境をこえたグローバル化の実態を反映。
- ④ 各系統項目には日本のページを特設し、日本の特色や課題を考察。
- ⑤ 第Ⅱ編で大観した世界像は、第Ⅲ編の地誌学習での地域像と補充しあい、世界規模から地域特有の事象までの理解に役立つ。

第Ⅰ編 地図と地理的技能

図法・時差
主題図・地形図・読図
23頁

全分野・全地域を
ていねいに解説

第Ⅱ編 系統地理的考察

全項目掲載

地形、土壌・植生、気候
農林水産業、資源・エネルギー
工業、交通・通信、貿易
観光、人口、村落・都市
衣食住、民族・宗教、言語
149頁

第Ⅲ編 地誌的考察

全世界掲載

中国、韓国、東南アジア
インド、西・中央アジア
アフリカ、EU、ドイツとポーランド
ロシア、アメリカ、ブラジル
オーストラリアとカナダ、日本
136頁

基本知識を整理し充実した本文▶▶▶ 分布や成因・現象をステップを踏んで整理・探究

第Ⅱ編 1章1節 地形

▲トロンボロ(陸架砂州)
(北海道函館市、2006年撮影)
奥の陸地からのびた砂州が手前の
前面山とつながっている。

▲海岸の地形
▲沿岸流が流れる地形
▲2 海岸の地形

●沿岸流 海岸線に沿って海
向きの流れをいう。海岸線に
斜めに入ってくる波が砕けるこ
とによってつくられる。

●海食台と波食棚
海食台は海食からなる平たかに
連続する海食台に対し、波
食棚は海面ほぼ水平な波
食面と海面に急な崖をも
つ。岩石の多い海岸では、
海面下の岩石も削られて海
食台がつくられるが、かた
い岩石の海岸では海面付近
しか削られず波食棚がつく
られる。干栗原、厚岸岬は波
食棚である。

●砂州と砂嘴
砂州とは、砂でできている
水面上の幅広い帯状の地
形。そのうち両側の崖の
ように先端のくぼんだ地形を
砂嘴という。鳥取県三保半
島や京都府天橋立は砂州、
北海道野付町や静岡県三保
の駆籠などは砂嘴である。

▲波がつくる地形
陸地と海が接する海岸では、波の力や沿岸流によって
侵食や土砂の運搬・堆積がおこっている。海岸は、岩石
からできていれば岩石海岸、砂でできていれば砂浜海岸とよばれる
(図2)。岩石海岸は山地や台地が海に面する地域に発達している。海
岸線付近では、波の侵食作用により岩石が削られて急傾斜の崖である
海食崖がつくられる。そのときに海側には波で削られた波食棚や海食
台とよばれる地形ができる。砂浜海岸は、堆積平野の海岸部や砂を大
量に運び出す河口部、侵食が激しい海食崖の麓などに発達しやすい。砂
浜海岸は、大きな波がきたときには侵食され海岸線が陸側に移動する
が、静かな波になるとは侵食され海岸線が陸側に移動するが、静かな波
がなくなり、海岸線は元の状態に戻る。

▲沿岸流が流れる地形
海岸の砂は基本的には、波によって岸や沖に向かって移
動するが、河口や海食崖から供給された砂は、沿岸流に
よって海岸線に沿って少しずつ移動する。この砂が海岸付近に堆積する
と、砂州、砂嘴とよばれる地形ができる(図3)。砂州が河口に向かっ
て成長し沖合の島とつながった地形をトロンボロ(陸架砂州)といい、ト
ンボロによってつながれた島を陸架島という。また河口の一端から他端
に向けて細長く伸びる砂州は、内湾(入り江)をふさいで、北海道のサロマ湖
や風蓮湖のような潟湖(ラグーン)をつくる。さらに潟湖が砂で埋まっ
て干潟がつくられることもある。安定した砂浜では、波や沿岸流によっ
て運ばれてくる土砂と運ばれていく土砂との量が釣りあっているが、第
2次世界大戦後の河川上流部のダム建設によって、河口から海へ排出さ
れる土砂量が減少し、海岸侵食が進行している砂浜海岸が多い。

▲リアス海岸(スペイン北西部)
スペイン国で入江をリアとよぶこと
でも知られる。

▲フィヨルド(ノルウェー南部)
カナダ、アラスカの太平洋岸やチリの南岸
フトラ川(アタカマ川)の河口にもみられる。

▲エスチュアリー(アメリカ北部)
テムズ川(イギリス)、エルベ川(ドイツ)、ラ
ブラダ川(アメリカン)の河口にもみられる。

▲海面上昇の影響
地殻変動により陸地が沈降したり、気候温暖化により
海面が上昇したりすると、陸地は沈没する。反対に、
陸地が隆起したり気候の寒冷化により海面が低下したりすると、海底の
地形が隆起して陸化する。このような沈水・隆水によって、特徴的な海
岸地形がつけられる。

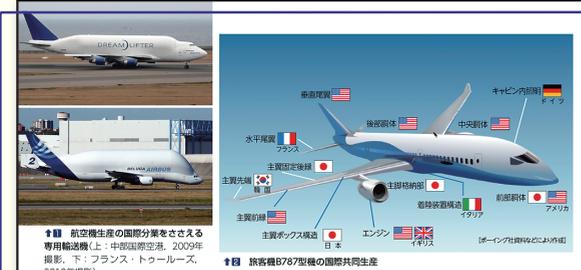
▲沈水海岸の地形
沈水がおこると、海面が低かった時期につくられた谷に
海水が入りこみ、おぼれ谷ができる。山地が広範囲に
沈水すると、東北地方の三陸海岸やスペイン西部のように、小さな
入江と岬が隣り合う锯齿状の海岸線のリアス海岸ができる(図4)。ノル
ウェー-西海岸などの高緯度地方には、かつて氷河の侵食でできたU字
谷が沈水し、湾の縁奥部がリアス海岸に比べて広いフィヨルドとよば
れる細長い湾や入江ができる(図5、写真6)。リアス海岸やフィヨルド
は深くて波が静かな湾をもつが、背後の陸地に平地が少なく陸路の交通
が不便なため、大規模な港は発達しにくい。大きな河川の河口部が沈水
すると、河口がラッパ状の入江となり、エスチュアリー(三角江)がつく
られる(図6)。ここは河口部の水深が深く、内陸の平野部も広いので、
貿易港が発達することが多い。このように沈水によってつくられた海岸
を沈水海岸といい、出入りの多い複雑な海岸となることが多い。

▲隆水海岸の地形
隆水がおこると、土砂の堆積した浅い海底は海岸平野とな
り、平坦化された岩石海岸の海底も隆化する。海岸平野
や隆化した岩石海岸が波の侵食を受けると、海食崖がつくられる。海食
崖よりも陸側の平坦な土地を海岸段丘といい、隆水と侵食のくり返しに
より階段状に並ぶものもある。こうした隆水の影響でできた海岸は隆水
海岸とよばれ、出入りの少ない直線的な海岸になることが多い(図7)。

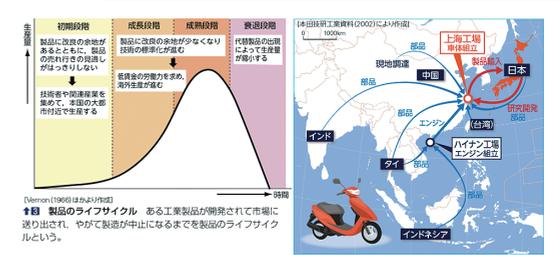
● 模式図・写真の活用
典型的な海岸地形の解説で
は、模式図や写真を活用し、
成因・条件・形状をていね
いに整理。

● 混同しやすい用語を整理
「海食台と波食棚」「砂州と砂嘴」
など、海岸地形の学習上、混同
しやすい地理用語を対して整
理。

● 典型的な沈水海岸地形
リアス海岸、フィヨルド、エ
スチュアリーを地図・写真を活用
して、成因や地形の形状、規模
の違いなどを整理。



✎航空機生産の国際分業をさせる専用輸送機(上):中国国際空港, 2009年撮影。下:フランス・トゥールーズ, 2010年撮影。
✎旅客機B787型機の国際共同生産



✎製品ライフサイクル ある工業製品が開発されて市場に送り出され、やがて製造が中止になるまでを製品のライフサイクルという。
✎日本企業のスクーター生産のネットワーク



✎中国の日本企業のスクーター工場(天津, 2002年撮影)

4 グローバル化する工業生産と多国籍企業

国境をこえる工業生産 ある製品がどの国でつくられたかが、たいへんわかりにくくなっているのが現代のグローバル化時代である。旅客機でさえ、最終組立はアメリカやフランスで行われても、実際の機体は部品ごとに異なった国で製造されている(図4)。このように、X部品がA国で、Y部品がB国で生産され、完成品がC国で組み立てられるという具合に、ある製品を製造するための工程が国境をこえて複数の国にまたがるという状況が生み出されている。こうした状況は、国と国との貿易・分業という観点からすれば、従来とは異なる「新しい国際分業」ととらえることができる。従来の国際分業が農産物や天然資源と工業製品の貿易(垂直貿易)、また工業の最終製品どうしの貿易(水平貿易)よりも貿易関係であったのに対して、新しい国際分業では、同一の企業内や同一の企業内での部品の貿易が大きな役割を果たしている。

製造業企業の多国籍展開 新しい国際分業が進んだ背景には、製造業において企業の国境をこえて複数の国にまたがる多国籍化が進行したことにあつた。このような事業活動を行う企業を多国籍企業とよぶ。製造業で多国籍化が進んだ理由の一つは、本国からの製品の輸出が、つねに為替レートの影響を伴うように、相手国との間で貿易摩擦をおこすことであつた。こうした問題を解決するため、多くの企業はまず製品を販売するための子会社などを外国に設立し、組立工場や部品工場も外国に建設して現地生産を行うようになった。第二の理由は発展途上国との賃金格差である。先進国の企業は新製品の開発は本国で行っても、製品の価格標準化が進むと、賃金の安い発展途上国へ製造を移して利益の向上をはかるようになった(図5)。

- **グローバル化時代** 1990年代以降の経済の地球規模化(グローバル化)の進んだ時期をいう。ソ連の崩壊による東西冷戦の終結や、EFTA・NAFTA・AFTA(ASEAN自由貿易圏)の結成に向けた動き、発展途上国での輸出指向型工業政策の導入など、中国の市場経済の導入などがきっかけとなって、国境をこえた経済活動が盛んになった。
- **為替レート** 2種類の通貨での交換比率をいう。先進国では1973年までドルとの固定相場制をとっていたが、変動相場制へと移行した。
- **貿易摩擦** 二国間の貿易で、一方の国が赤字を赤字。一方の国が大幅赤字になることによる、両国間に対立関係が生じること。1970年代後半には、日本からアメリカへの自動車輸出が急増することにより、両国間に貿易摩擦が生じた。

グローバル化時代の製造生産 多国籍化が進化する以前の工業は、一つの国の中で、すぐれた条件をもつ地点に立地する傾向があつた。しかし、多国籍化の進展によって、立地条件は国境をこえ、空間的に大幅に拡大するようになった。多国籍企業は、たえず製品や部品をどこに供給し、どこから調達すれば最も効率よく生産活動を行えるかといった工場の役割分担について、各工場の設備状況や各国の制度・制約などをふまえて、考えなければならなくなった。また、新規工場を立地させる場合にも、グローバルな分業関係を考慮する必要が生じた。このように、多国籍企業内での工場どうしの役割分担の効率化をはかることをグローバルな最適化という。図6はある日本企業のスクーター生産のアジアのネットワークを示している。インドやタイ、インドネシアの各工場は、自国に供給する部品を生産するとともに、中国の組立工場を経て日本に供給する部品も生産している。

現地化を進める多国籍企業 企業が市場の拡大や生産性の向上のために多国籍化を進めていく際には、さまざまな配慮が必要である。本国の消費者の好みに合った製品の仕様や価格帯が、必ずしも進出先の国で受け入れられるとは限らない。そのため、進出先の消費者の好みに合わせて製品を改良しなければならない。また、雇用や取引、職場組織などの制度や慣習も、本国と進出先とは異なる。たとえば、生産を縮小して労働力が余ったとき、ある国では従業員の削減が許されるなど、雇用調整の方法も進出先の事情に合わせる必要がある。多国籍企業が現地市場に入りこむためには、相手国のさまざまな制度や慣習を理解したうえで、世界水準と本国とは異なる現地の状況に適合することを多国籍企業の現地化という。

ワークシェアリング 1人当たりの労働時間の短縮により、雇用を分けあうこと。企業の業績が悪化したときに雇用数を減らしたり、不況時に雇用機会を奪ったりするために用いられる。

● **国際化に関する用語**
為替レート、貿易摩擦、ワークシェアリングなど、国際化のキーワードとなる地理用語をていねいに解説。

● **多国籍企業の展開**
工業生産の国際分業の実情→背景と要因→最新動向と今後の課題という流れで、ステップを踏んで構成。

● **理解しやすい主題図**
国際分業、製品ライフサイクルの展開など、実態がイメージしやすいように実例をあげ、写真とともに解説。

特設ページ「世界のなかの日本」▶▶▶ 世界の学習をふまえて日本の特色・課題を捉える

世界の中の日本

品名	オーストラリア	インドネシア	ロシア	自給率(2008年)
石炭	1.02	0.00	0.00	0.0%
原油	21.9%	11.5%	11.2%	0.6%
液化天然ガス	20.5%	19.5%	15.0%	5.1%
鉄鉱石	61.2%	27.2%	0.0%	0.0%
銅	36.1%	8.8%	0.0%	0.0%
アルミ	21.9%	21.4%	12.0%	9.6%
ニッケル	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

日本の資源の輸入先と自給率 (開国後貿易開始時:2008年)

石炭産出地(鹿児島県日置市, 2007年)

日本の資源・エネルギー問題

持たざる国 日本は世界第3位のGDP(国内総生産)をもつ豊かな先進工業国であるが、エネルギーや原料資源のほとんどを輸入に頼っている。日本が現在の経済活動や生活水準を維持するためには、資源を安定的に輸入し続けることが最重要課題であり、同時に輸入した資源の有効利用が求められる。

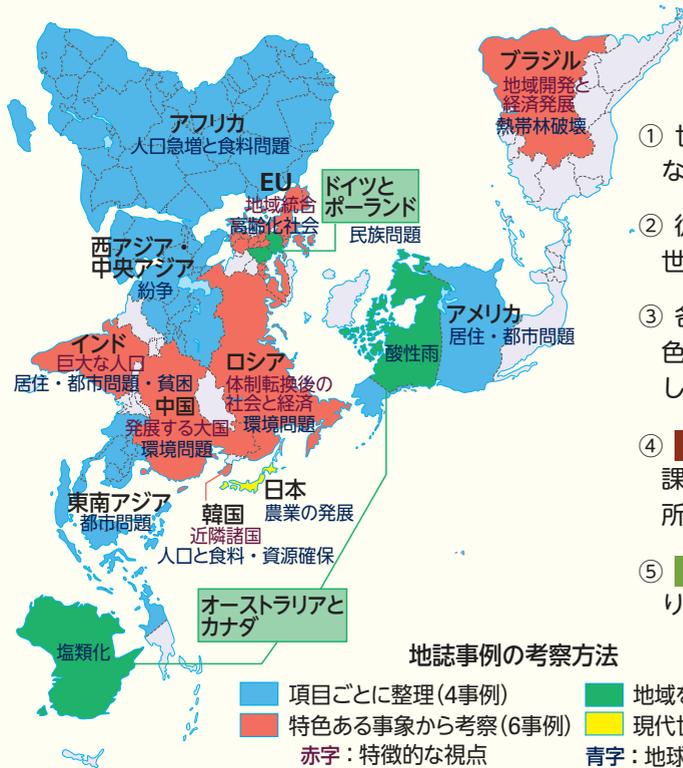
資源の安定供給のために、日本は外交や経済援助などを通じて、国際社会の安定や、資源を「持てる国」との関係強化に努めてきた。また、輸入先を特定の国や地域に依存せず、分散させて輸入の安定をはかる努力も重ねてきた。しかし、資源は偏在している場合が多く、石油は西アジアへの依存度がむしろ高まるなど、必ずしも分散に成功してはいない。

GDP(国内総生産)当たりの1次エネルギー消費量(2009年)を比較すると、日本はエネルギー消費量が少なく、エネルギー効率が高いことがわかる。

各系統項目に「世界のなかの日本」の特設ページを設定。
教科書の最終章「現代世界と日本」での日本を探究するための基礎知識を培う。

- 日本列島の地形と災害
- 日本の気候
- 日本の農林水産業
- 日本の資源・エネルギー問題
- グローバル化のなかの日本工業
- 日本の観光
- 日本の人口問題
- 日本の村落・都市の課題
- 日本の領域と領土問題

第II編 2章2節 資源・エネルギー



ポイント

- ① 世界の諸地域を偏りなく学習できるように、様々な規模にわたる13事例をバランスよく掲載。
- ② 従来の指導要領の事例数制限がなくなったため、世界全域をカバー。
- ③ 各地誌は、「項目ごとに整理する」(方法1)、「特色ある事象から考察する」(方法2)、「地域を比較し考察する」(方法3)の三つの方法で考察。
- ④ **地球的課題** 地域で特徴的にみられる地球的課題を選定し、地域的特色からみた現状や課題の所在、解決の方法を示したコラムを設定。
- ⑤ **地域をみる** 取り上げた地域の近隣地域を取り上げ、類似性・異質性や関連を考察。

方法1

項目ごとに整理 ▶▶▶ 地理項目ごとに整理して地域を見出す

● 項目で整理
アメリカは、歴史的背景、自然、農業、鉱工業、住民と文化、都市などの項目を設け、基本の地理項目ごとに記述。

● 学習の導入
学習を始める際、イメージしやすい身近な話題や問いかけを設定。

● 学習の指針
節の目標と習得すべき内容を明記。

第10節 アメリカ —項目ごとに整理する

1 アメリカの移民と開拓

私たちのまわりにはアメリカ発祥の物や技術、文化をあげてみよう。インターネットや携帯電話、コンピュータやゲームやハリウッド映画、ファストフードやコンビニ、Tシャツにジーンズなど多数ある。一方、アメリカは軍事大国であり、国際政治の中心的存在でもある。アメリカをさまざまな角度から学習してみよう。

西への拡大 アメリカの国土は東から西に、いくつかの段階を経て拡大し、統合されていった。1776年の独立宣言の際に東部の13州しかなかったアメリカは、その後、新しい国土を次々に獲得し開拓前線(フロンティア)が西へ移動していった(図2)。ミシシッピ川から西の広大な土地をフランスから購入したのは、1803年のことである。アパラチア山脈の西方は、農業に連した広大な平原であったため、タウンシップ制に代表される規則的な土地区画に、多くの移民たちが開拓農民として入植した。

アメリカ西部の開拓には、大陸横断鉄道の建設が大きな役割を果たした。東部からサンフランシスコに通じる鉄道が1869年に開通したほか、ロサンゼルスに通じる鉄道も1883年に完成し、19世紀後半には日本の大陸横断鉄道があいついで建設された。国土が西に拡大し、東部からの人口が流れこむにつれて、新しい州が次々につくられた。アメリカ本土の48州がそろったのは、1912年のことである。1959年には、アラスカとハワイが州に昇格して、現在の50州になった。先住民であるネイティブアメリカン^①は、もともとアメリカ全域に居住していたが、移民の入植とアメリカ国土の拡大に伴って、しだいに居住領域を失い、西部を中心に分布するインディアン^②保留地へと追いやられた。

① アメリカの移民

年	事項
1776	独立宣言
1787	アメリカ合衆国成立
1861-65	南北戦争
1929	大恐慌の発生
1950-53	朝鮮戦争
1950-90	冷戦競争
2001	9.11同時多発テロ
2009	東洋に大規模な震災

② アメリカの移民

年	事項
1821-30	ドイツ
1831-40	北アメリカ
1851-60	アフリカ
1861-70	中国
1871-80	イギリス
1881-90	フランス
1891-1900	イタリア
1901-10	日本
1911-20	韓国
1921-30	インド
1931-40	フィリピン
1941-50	中南米
1951-60	東南アジア
1961-70	中南米
1971-80	中南米
1981-90	中南米
1991-2000	中南米

第10節 アメリカ —項目ごとに整理する

移民の国 独立時のアメリカは、イギリスからの移民が中心であり、WASP(白人・アングロサクソン(イギリス系)・プロテスタント(新教徒))とよばれる人々が、その後のアメリカでの政治や経済、文化の支配階層をつくっていった。このため、アメリカとカナダを合わせてアングロアメリカともよぶこともある。しかし、国土が拡大し、経済も発展するにつれて、独立後のアメリカにはイギリス以外にも多数の移民が流入するようになった。

その内訳をみると(図3)、19世紀に流入したアメリカへの移民のほとんどはヨーロッパ出身者であるが、20世紀に入ってからラテンアメリカの出身者(ヒスパニック)がしだいに増大し、1970年代からはアジアからの移民も高い割合を占めている。また、ヨーロッパのなかでも、初期にはイギリスやアイルランドの出身者が多かったが、19世紀後半になるとドイツや北ヨーロッパの出身者が多くなるなど、出身地域は変化している。これらの移民とは別に、南部のプランテーション労働者としてアフリカ大陸から強制的に移入された人種奴隷が17世紀の前半からみられ、南北戦争が終結した1865年まで続いた。

人口の増加 1900年に約7500万であったアメリカの人口は、1950年に約1億5000万、2005年には約3億と急速に増加している(図4)。1960年代以降は、高齢化・少子化の傾向がみられるものの、ヨーロッパや日本などの先進諸国に比べて、いぜんとして高い人口増加率を保っている。

アメリカは現在も多数の移民を受け入れている。これらの移民は、人口増加に直接結びつくだけでなく、その出生率が相対的に高いことから、間接的に人口増加に役立っている。

自由の女神像(2007年撮影) 1886年にニューヨーク港の入口に建てられた自由の女神像は、ヨーロッパからの移民たちにとって希望の土地アメリカの象徴であった。

① アメリカの人口

年	人口(百万人)
1900	75.0
1950	150.0
2005	300.0

第Ⅲ編2章1節 中国—発展する大国に着目する

2 発展する工業と貿易構造

工業の発達と 工業地域の展開

中国の工業は、1990年ころまでは食品、繊維、化学、鉄鋼、一般機械の製造が安定した成長をみせていたが、その後さらに電子・通信機器や家電、自動車関連の工業が大きくなってきている。

中国の工業地域は、改革・開放政策による経済開発の拠点に指定され、海外との交通に便利な沿海部を中心に発達している。特に上海を中心とする長江のデルタ(三角洲)や、広東省のチェウ(珠江)デルタの周辺が代表的な工業地域である。一方、内陸部には原料地指向の立地がみられ、近隣の石炭や鉄鉱石の資源を生かして、鞍山や武漢では鉄鋼業が発達し、大連では石油精製業や石油化学工業が発達している。

外国からの工業投資

1990年代以降の中国の経済発展は、香港や外国からの投資によるところが大きい。1990年代後半以降、外国からの投資は急増しており、投資額のうち60〜70%は製造業への投資である。投資元は香港が最大で、タックスヘイブンであるイギリス領ヴァージン諸島を別とすれば、次に日本や台湾、韓国、アメリカからの投資が多い。投資先は沿海部に集中しており、広東省や江蘇省、上海市への投資が特に多い。外資系企業による工業生産は、コンピュータなどの電子・通信機器や自動車占める割合が大きい。結果として中国の貿易額の半分以上は、外資系企業の活動によって占められている。

中国への外国からの投資額

年	中国	アメリカ	日本	ドイツ	フランス	イギリス	韓国	台湾	香港
1990年	100	100	100	100	100	100	100	100	100
2002年	400	100	100	100	100	100	100	100	100
2006年	600	100	100	100	100	100	100	100	100

● タックスヘイブン 税負担が軽い税制による地域のこと。企業や個人が税を避けるために、税負担の軽い地域に拠点を移すことがある。

● 中国に輸出している企業の身元を調べてみよう。

● 中国の生産拠点と貿易の工業製品と割合

● 中国の輸出の構成と貿易の相手国・地域

● 加工貿易 原料や燃料、半製品を輸入し加工して輸出する貿易形態。

● 外資系企業 政府または中央銀行の発行する外資に準じている企業をいう。

● レアアース レア金属のうち希土類元素とも呼ばれる。ハイブリット車、電気自動車のモーターやデジタルカメラのレンズなどの生産には欠かせない。

1 中国の省別の外国企業投資額の推移

中国は市場経済による経済発展をさらに進めるため、2001年にWTO(世界貿易機関)に加盟し、世界各国との貿易を一段と活発化させている。中国の貿易は、原料や部品を輸入して工業製品を輸出する加工貿易の形が多く、輸入品としては集積回路などの工業部品や石油、鉄鉱石が多いことに特徴がある。同時に光学機器などの精密機械の輸入も多くなっている。一方、輸出品としては、電子・通信機器のほか、衣類や繊維製品などが多い。貿易相手国・地域をみると、輸入は日本やEU、韓国、台湾などと、輸出はEUやアメリカ、香港などが多い。輸出と輸入とを比べると輸出額が輸入額よりも大幅に多い貿易黒字が続いており、アメリカとの間では貿易摩擦も生じている。貿易黒字の結果、外資準備高は世界最大である。

中国の輸出の構成と貿易の相手国・地域

相手国・地域	輸出額(2007年)	輸出割合(%)
EU	1,428.8	43.0%
アメリカ	1,024.8	30.5%
韓国	200.0	6.2%
台湾	180.0	5.6%
香港	150.0	4.6%
日本	100.0	3.1%
その他	1,000.0	30.6%

中国の輸入の構成と貿易の相手国・地域

相手国・地域	輸入額(2007年)	輸入割合(%)
EU	1,200.0	35.0%
アメリカ	1,000.0	29.0%
韓国	200.0	6.0%
台湾	150.0	4.5%
香港	100.0	3.0%
日本	100.0	3.0%
その他	1,000.0	29.5%

中国の石油と鉄鉱石の産出量

資源	産出量(2006年)
鉄鉱石	1.5億トン
石油	1.5億トン

● 国際情勢反映 国際影響力が強まった中国は「発展する大国」の主題で考察。歴史的経緯や現況、課題などの新しい切り口で解説。

第Ⅲ編2章12節 オーストラリアとカナダ—国を比較する

12 第12節 オーストラリアとカナダ—国を比較する

1 ヨーロッパ人の植民と土地開発

オーストラリア オーストラリア大陸の存在は、1770年のクックの探検でヨーロッパの人々に知られるようになった。移民の歴史はシドニーのポートジャクソン湾周辺のイギリスの流刑植民地から始まり、植民地による土地の開発は温暖湿潤な南部の海岸平野から内陸部の半乾燥地帯へ進んでいた。イギリス系の人々が多く植民するようになると、先住民のアボリジニーの人口は白人との衝突や免疫のない病気の流行などにより、約30万から約6万に激減してしまった。

ポイント補説 オーストラリアとカナダの多文化社会

オーストラリアの多文化社会への経緯

白人主体のオーストラリアを維持しようとする移民政策は、1970年代に顕著な。現在の移民政策では、民族・人種や出身国などによる新移民の割合は多岐にわたる。オーストラリアは移民を受け入れがめまされ、アジア諸国からの移民が多くなっている。その移民数は、1990年代以降移民総数の20%を占めることになり、地元のなかでのヨーロッパ系とアジア系移民の住み分けは、新たな地域的課題を生み出している。アジア系移民の多くは海外最大の都市メルボルンに集中して住む傾向があり、都市にはキリスト教の信教人口が約70%に低下し、イスラム教や仏教、ヒンドゥー教などの宗教人口が増加している。

2 ヨーロッパ人の植民と土地開発

カナダは17世紀以降、アジアへの経路の探索、あるいはタラシや毛皮の交易のために、ヨーロッパ人が居住するようになった。特に、イギリス系の人々はハドソン湾やニューファンドランド島周辺の海岸部に、フランス系の人々はセントローレンス川を上って内陸部に植民し、東海岸から五大湖周辺の土地が開墾された。18世紀になると、イギリスの勢力が急速に強くなり、フランス領(ケベック州)はイギリス国王の支配下になった。しかし、フランス系住民の存在は、その後の英語とフランス語の両方を公用語とすることや、ケベックの独立運動にも影響をおよぼした。

カナダにおける英語圏・フランス語圏と先住民の分布

カナダの多文化社会への経緯

ヨーロッパの人々が植民してきた歴史的な経緯から、カナダにはイギリス系カナダとフランス系カナダが存在する。このような社会の二文化性格を特徴づけることは、カナダの国家的課題でもある。この課題を克服するため、英語とフランス語の両方を公用語とする政策や、州の権限を尊重する連邦制が採用されてきた。しかし、ケベック州では住民の約60%がフランス系であり、フランスの要素を尊重したいというケベックナショナリズムが住民のアイデンティティ(帰属意識)に強く残っている。そのため、ケベックの「独立」や、連邦に帰属したいという地域的課題が今もなお存在する。その一方で、統一的なカナダのアイデンティティづくりも課題としてあげられている。

● 2 国の比較 オーストラリアとカナダを左右ページに配置し、項目を追いながら比較。各国の特徴がより鮮明に。

● 年表で整理 その地域の歴史的背景を、冒頭で年代整理。

地理的技術の特設コラム ▶▶▶ I 編を中心に図版や写真の読み取りなどの地理的技術を習得



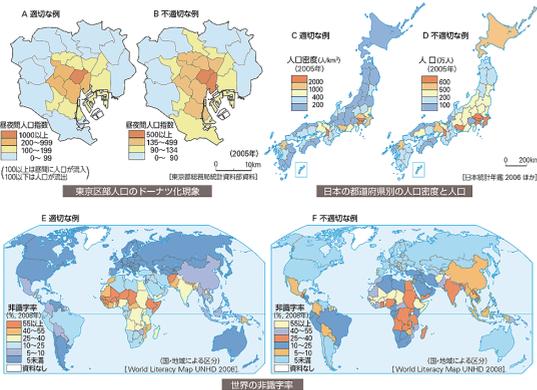
地理的技術

- 時差の計算
- 世界地図の「読み方」

- 階級区分図の作成方法の留意点
- 地形図の読み方
- 地形図を読む (火山地形・河岸段丘・扇状地・氾濫原・砂嘴・カルスト地形)
- 雨温図とハイサーグラフ
- 村落の形態を読む
- ドイツとポーランドの比較のまとめ
- オーストラリアとカナダの比較のまとめ
- 課題解決に向けての探究手順



階級区分図の作成方法の留意点



階級区分図の適切な例と不適切な例
階級区分図のAとB、CとD、EとFの組み合わせのうち一方は、作成方法が適切でない。二つの階級区分図を比べて、どこが異なっているのかを考えてみよう。

統計資料の地図化は作図用のソフトウェアの進歩で容易になったが、表現方法を間違えると誤解を与えてしまう。特に階級区分図では、階級の数や分け方を十分考慮しなければならぬ。階級の数が多すぎると、かえって分布の特徴がつかみづらくなるし、階級の分け方によっては分布の特色を正確に表現できなくなる場合がある。

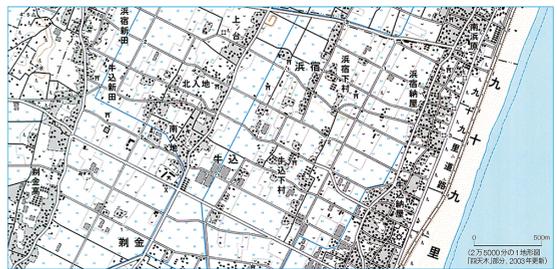
東京都区部の居住人口(夜間人口)が周辺部に比べて少ないドーナツ化現象を表現した階級区分図AとBでは、Bは適切ではない。それは、昼間人口指数が100をこえると昼間に人口が流入し、100を下回ると昼間に人口が流出することを意味するが、Bでは指数100を階級区分の境界線にしていないため、人口流出の読み取りができないからである。

また、単位となる領域の面積に大小の差がある場合は、面積の増減で影響する数値を階級区分図に表現するのは適切でない。階級区分図は、Cに示した人口密度のように、比率や1人当たりの数値などの相対的な指標をあらわすのに適している。逆にDに示したように、人口数といった絶対的な指標をあらわすのは適切ではない。Dの図では日本の中で北海道の人口が突出しているような誤った印象を与えてしまっている。

さらに、階級の差や色彩を決める際には、階級区分の数値の大小に応じて明から暗、暖色系から寒色系の色と順番工夫すると分布をとらえやすい。この点を考慮しないで階級区分の色彩を分けたFの図は、作図の意図が読み手に伝わりにくい。



① 市街地(北海旭川市) 旭川市は、明治時代に北海道の開拓と防衛のために計画的に設けられた。1899年(明治32)までに37か村が成立した。集落の形態は堤村・路村・敷村など多種多様であるが、計画的につくられたので、整然と地割りされているのが特徴である。



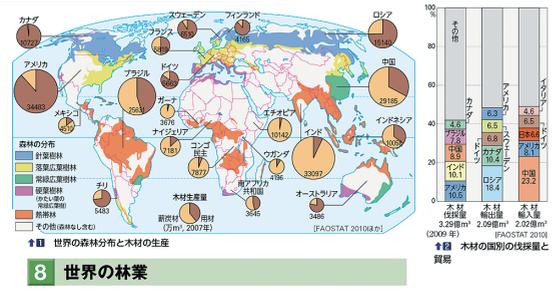
② 市街地(千葉県市川市) 九十九里浜は近世にイシ湾で決壊、海岸近くに納屋(消貝小屋)が建設された。海岸線から離れた納屋(納屋港ともいう)から納屋に移動する人口が多くなると、納屋集落ができた。地名からその成立過程を読むことができる。



③ 市街地(香川県高松市) 家屋は道路に沿って並び、家々が密集し、道路沿いに立地すると利便性の高い宿屋、運送業・飲食店などが多集落を、街村という場合もある。寺社への参道沿いに立地する門前町(→p.24)や、街道沿いに集まった宿場町などが代表的である。

地理的技術の応用 ▶▶▶ 豊富な主題図・グラフで読図力を高め、本文の内容を理解する

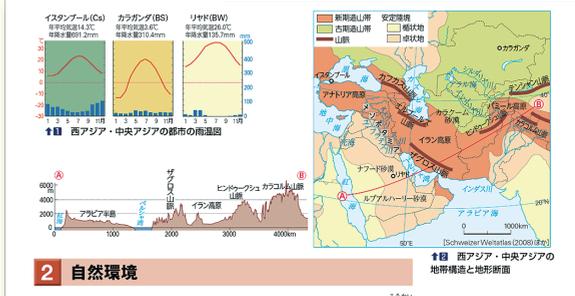
第II編 2章 1節 農林水産業



8 世界の林業

貿易や経済発展、人口動態、資源・エネルギー生産と消費など、主題図やグラフを豊富に掲載。主題図の読図・比較により、社会の実態や課題を読み取る。

第III編 2章 5節 西アジア・中央アジア



2 自然環境

各地誌の自然学習では、各気候区の代表的な雨温図と、主要地形を通過する地形断面図を掲載。読図を通して地域の特徴を把握。



最終章で地理学習の総決算 ▶▶▶ 地球規模の視点から日本の特色と課題を考察

I～Ⅲ編の学習を踏まえ、日本の特色や課題を客観的に整理。浮かび上がる課題を多面的・多角的に考察。



○ 輸入依存と輸出依存
中国のスーパーでの日本産りんごの宣伝
教科書 p.307



○ 超高齢社会の居住問題
高齢者とともに暮らす
教科書 p.308



第Ⅲ編 3章 1節 世界の中の日本

○ グローバル化時代へ
高校での留学生との交流
教科書 p.309

持続可能な社会に向けての課題解決 ▶▶▶ あるべき日本の国土像を探る

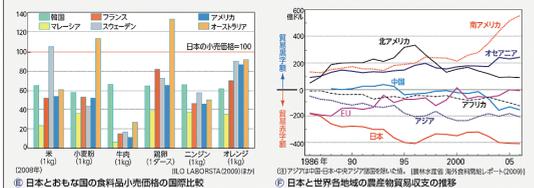
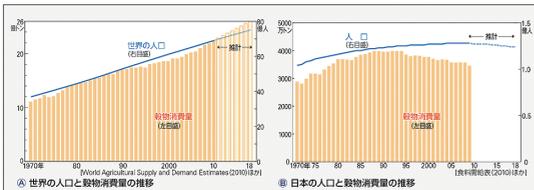
- ① 日本の食料自給率に着目し、「持続可能な農業の育成」を課題に設定。
- ② 輸入に依存する場合や国内で食料自給をめざす場合の問題点を資料で分析し、自然・経済・政治・技術・文化の面から検討、結果を提言へ。
- ③ 地理学習で得た知識や捉え方を、日本の課題解決に向けて自ら考え行動する力につなげる。

第Ⅲ編 3章 2節 持続可能な社会に向けて

2 課題「持続可能な農業の育成」の考察

課題の設定 地理Bの最後のまとめとして、日本のかかえる地理的な課題を探究し、その解決の方向性やあるべき国土像をさぐるためのグループ研究を行うことになった。1班は日本の低い食料自給率を課題として考えることにした。

生命の維持に水と食料は不可欠であるが、日本の食料自給率は低く、カロリー換算では約40%と半分以上を海外に依存している。また、日本の人口は減少に転じたが、世界の人口は増加が続くと推計されてお



資料の分析

穀物消費量推移, 農業就業者人口, 食料自給率, 小売価格, 農産物貿易収支

発表と討論 1班は検討結果を踏まえて、食料の確保と持続可能な農業を育成するための提言を作成し、クラス全員に発表した(図4)。1班の課題は、日本のかかえるほかの課題とも関連しているため、すべての班の発表後にクラス全体で総合的な討論を行い、さらに考察を深めることにした。



1班の発表した提言

解決への提言

耕作放棄地利用, 不利益地域へ補償, 生産性向上, 地産地消, 途上国支援

1 目標 現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

2 使用教材 教科書：新編詳解地理B(二宮書店)、現代地図帳(二宮書店)
副教材：データブック オブ・ザ・ワールド(二宮書店)、新編詳解地理Bワークブック(二宮書店)

3 年間指導計画

学期	3学期制	2学期制	月	授業時数	編配当時数	編	学習項目 (章・節)	学習内容とねらい	節配当時数	査 考 査 範 囲	
										3学期	2学期
1 学期	前 期		4 月	11	10	第1編 地図と地理的技能	第1章 地理情報と地図		7	1 学期 中期	前期 中期
							第1節 世界観の変化と地図	リモートセンシングやGISによる地図が地球の現状認識に役立つことに気づかせ、地理情報が生活と結びついていることを理解させる。様々な時代の世界地図の読図により地球に関する認識の違いに気づかせ、人々の世界観の変化を理解させる。	2		
							第2節 地球儀と世界地図	地球儀の活用や時差に関する学習から地球が球体であることを確認させ、1枚の世界地図は球面上の情報をすべて正しく表現できないこと、使用目的に応じて図法の異なる世界地図を使うことを理解させる。	3		
							第3節 地理情報の地図化	地図の種類とそれぞれの特色を理解させる。現代世界に関する統計を地理情報に加工し、分布図や階級区分図を作成できる地理的技能を習得させる。	2		
							第2章 地図と地域調査		3		
			5 月	16	第2編 現代世界の系統地理的考察	第1節 地図の活用	地形図、都市計画図、住宅地図などの特色を理解させ、地域調査の目的や方法に適した地図を選択し、入手できる能力を習得させる。	1			
						第2節 身近な地域の調査	地域調査の手順を理解させる。資料の収集と整理、現地調査、考察やまとめ・発表などの活動を通して、生活圏の地域的特色を捉える地理的技能を習得させる。新旧の地形図から地域の変化を読み取る能力を習得させる。	2			
						第1章 自然環境		25			
						第1節 地形	規模や形成要因の違う様々な地形を取り上げて、その分布や形成要因から基礎的知識や概念を習得させ、地形と生活との関係を考察させる。地形図の読図に関する地理的技能を習得させる。	9			
						第2節 気候	地球規模でみた気温・降水量・大気循環、海洋や水の循環を取り上げ、それぞれの特色や形成要因を考察・理解させる。	4			
6 月	16	第2編 現代世界の系統地理的考察	第3節 自然と生活	世界の気候区分の方法や世界規模からみた植生・土壌の特色を理解させる。世界の気候帯を取り上げ、その分布や形成要因、気候と人々の生活との関連について考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	8						
			第4節 自然環境に関する諸問題	地球温暖化、オゾン層の破壊、砂漠化、森林破壊、大気汚染、異常気象を取り上げて、それら大観しながら自然環境の諸問題に関する分布や形成要因を考察させ、基礎的・基本的な知識を習得させる。	4						
			第2章 資源と産業		24						
			第1節 農林水産業	世界の農業・水産業・林業を取り上げ、それぞれの特色や分布、形成要因などについて考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。世界や日本の食料問題・課題を世界的視野に留意して概観させ、形成要因を考察させる。	7						
7 月	10	第2編 現代世界の系統地理的考察	第2節 資源・エネルギー	世界の資源・エネルギーを取り上げ、それぞれの特色や分布、形成要因などについて考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。世界や日本の資源・エネルギー問題を世界的視野に留意して概観させ、形成要因を考察させる。	5						
			第3節 工業	世界の工業の成り立ち・立地を取り上げ、工業地域の形成と変容に関して考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。グローバル化する中での世界と日本の工業に関して世界的視野に留意して、それらの動向・形成要因について考察させる。	6						
			第4節 流通と消費	世界の交通・情報通信・貿易・商業・観光を取り上げて、それぞれの特色と動向、形成要因に関して考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。それぞれの課題に関して世界的視野に留意して考察させる。	6						
2 学期			9 月	13		第3章 人口と村落・都市		11	1 学期 期末	前期 期末	
						第1節 人口	世界の人口分布、人口増加・人口構成に関する動向を取り上げて、形成要因に関して考察させ、基礎的・基本的知識を習得させる。世界の人口増加地域と減少地域の人口問題を比較しながら、日本の人口問題とも関連させて考察させる。	5			



学期	月	日	単元	内容	単元時間	学期		
						前期	後期	
2 学期	10 月	13	第 2 節 村落・都市	様々な規模の集落があることを理解させ、村落の立地と形態、都市の発達と変容に関して考察させて、村落・都市に関する基礎的・基本的知識を習得させる。世界と日本の居住・都市問題の地域性や形成要因について世界的視野に留意して考察させる。地形図の読図から村落の形態を読み取る地理的技能を習得させる。	6	2 学期 中間		
				第 4 章 生活文化と民族・宗教	9			
				第 1 節 衣食住	3			
				第 2 節 言語と宗教	2			
	11 月	13	第 III 編 現代世界の地誌的考察	第 3 節 民族と国家	民族と国家との関連を理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。世界的にみた民族と国家との多様性や日本の領土問題について考察させ、国家群や国連の役割を理解させる。	4	後期 中間	
				第 1 章 現代世界の地域区分	現代世界が自然、政治、経済、文化などの指標によって様々な地域に区分できることを理解させ、多様な区分から現代世界の特色を理解させる。	2		
				第 2 章 現代世界の諸地域	55			
				第 1 節 中国	国家規模の大国としての中国について「発展する大国」に着目させ、それと歴史的背景や工業、貿易、農業、人口、環境問題とを結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	6		
				第 2 節 韓国	隣国としての韓国について「近隣諸国との関連」に着目させ、それと歴史的背景や文化の特色、経済の著しい発展、人口と食料・資源確保の課題とを結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4		
				第 3 節 東南アジア	国家よりも大きく州よりも小さい規模の東南アジアを、歴史的背景や民族、自然、農業、工業、都市問題という項目ごとに整理して地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	5		
				第 4 節 インド	国家規模の大国としてのインドについて「巨大な人口」に着目させ、それと歴史的背景や自然、農業、工業、生活、居住・都市問題・貧困とを結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4		
				第 5 節 西アジア・中央アジア	アジアの中の 2 地域である西アジア・中央アジアを、位置と歴史的背景、自然環境、農牧業、鉱工業とサービス業、イスラム教と人々の生活といった項目ごとに整理して地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4		
12 月	12	第 III 編 現代世界の地誌的考察	第 6 節 アフリカ	大陸規模の地域としてのアフリカを、歴史的背景、自然、農牧業、鉱工業、紛争、人口急増と食料問題という項目ごとに整理して地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4	2 学期 期末		
			第 7 節 EU	国家の集合体としての EU について「地域の統合」に着目させ、それと歴史的背景、自然、産業、言語・宗教、都市と交通、地域変化、高齢化社会への対応と結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	6			
			第 8 節 ドイツとポーランド	EU 内で隣接する国家であるドイツとポーランドを、類似性をもつ二つの国家として、自然、民族と文化、産業、課題について比較しながら地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	2			
			第 9 節 ロシア	国家規模の大国としてのロシアについて「体制転換後の社会と経済」に着目させ、それと歴史的背景や産業、自然、世界との結びつき、環境問題を結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4			
1 月	14	第 III 編 現代世界の地誌的考察	第 10 節 アメリカ	国家規模の大国としてのアメリカを、歴史的背景、自然、農業、鉱工業、住民、都市化、世界との結びつき、居住・都市問題という項目ごとに整理して地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	6	3 学期 期末	後期 期末	
			第 11 節 ブラジル	国家規模の大国としてのブラジルについて「地域開発と経済発展」に着目させ、それと歴史的背景や民族、自然環境と農業、資源開発と工業、貿易、生活、国土開発と熱帯林破壊とを結びつけて地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	4			
			第 12 節 オーストラリアとカナダ	南半球に位置するオーストラリアと北半球に位置するカナダを、対照性をもつ国家として捉え、それを歴史的背景、土地開発、土地資源の分布と利用、環境問題を比較しながら地域的特色と地球的課題を考察・理解させ、基礎的・基本的知識を習得させる。	6			
			第 3 章 現代世界と日本	4				
			第 1 節 世界の中の日本	今までの学習を基にして、日本の自然、産業構造、人口構成と居住問題、伝統文化保全とグローバル化に関して、日本がかかえる地理的な課題を生徒自らに発見させ、その課題を多面的・多角的に考察、探究させる。	2			
3 月	6	第 III 編 現代世界の地誌的考察	第 2 節 持続可能な社会に向けて	「持続可能な農業の育成」を例として、第 1 節で自ら発見した課題を解決するための方法を身につけさせる。地理的技能を活かして資料を作成させ、課題解決のための提言を行わせ、日本がかかえる地理的課題の解決の方向性や将来の国の在り方について展望させる。	2			



◎ 選定理由の例

内容	<ul style="list-style-type: none"> ・高等学校の地理教育で扱うべき内容がわかりやすく解説され、現代世界の実情や課題も示されているため、生徒が自ら読んで理解できる教科書になっている。 ・系統項目の全分野が幅広く掲載されているほか、地誌事例で世界全域が扱われており、日本の内容も随所でおさえられているため、質・量ともに十分な内容の教科書といえる。
構成・分量	<ul style="list-style-type: none"> ・紙面がこれまでのA5判からB5判に拡大されて写真や図版が大きくなり、さらに欄外の活用によってコラムや用語解説が設けられて、より授業を発展できるような資料性の高い教科書になっている。 ・地図などの地理的技能はI編で習得した後に、続く系統地理(II編)や地誌事例(III編)での読図などを通して定着できるようになっており、学習の流れを構築しやすい構成になっている。
表記・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・適格な情報が盛り込まれている図表(552点)と地理写真(407点)が本文と密接に結びついているので、学習内容が理解しやすい。 ・重要な地理用語が太字でおさえられているほか、関連を示す参照ページがていねいに施され、振り仮名も適宜ついているため、読みやすく理解しやすい。
選定理由	<p>系統地理的分野、地誌ともに内容が充実しており、世界を多角的・多面的に考察することができる。また、資料性の高い図表・写真やコラムを活用することにより、本文の流れにそって地理的知識を確実に学習することができる。そのため世界の多様性を認識し、生徒自ら考える力をつけられる適切な教科書と考える。</p>

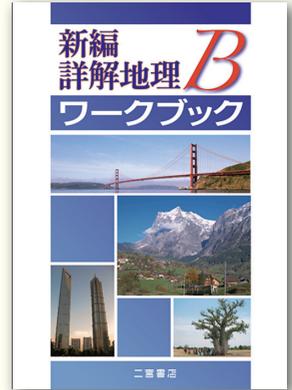
◎ 評価の規準と方法の例 (第II編の一部)

編	学習項目 (章・節)	評価の規準				評価方法
		関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用の技能・表現	知識・理解	
第II編 現代世界の系統地理的考察	第1章 自然環境	○世界の自然環境に関する地域性や規則性、それらの形成要因に関する関心と課題意識を高めたか。 ○世界の自然環境に関して系統地理的に追究する学習に積極的に取り組む、世界的視野から捉える視点や方法を身につけようとしたか。 ○現代世界の自然環境と人間生活とのかかわりや自然環境に関する課題を積極的に理解しようとしたか。	○世界の自然環境の分布やその形成要因に着目し、系統地理的に考察する視点を設定して、それらと人間生活とのかかわりについて考察したか。 ○地球規模で進行している自然環境の悪化や破壊等の問題について、世界的視野に留意して考察できたか。	○世界の自然環境に関する分布図や統計資料を活用し、分布の特色について分析する技能を身につけたか。 ○統計資料から分布図を作成したり、グラフ等で表現したりする技能を身につけたか。 ○地形図の読図に関する技能を身につけたか。	○世界の自然環境の空間的な規則性、傾向性、それらの形成要因等を系統地理的方法で捉える視点や方法を身につけたか。 ○世界の自然環境の分布や動向に関する基礎的・基本的知識や概念を習得できたか。 ○現代世界の自然環境の悪化や破壊等の問題について、世界的視野から理解できたか。	○教室における授業の取り組み状況や発言等の学習状況。 ○世界の自然環境に関する白地図、ワークブック等の作業結果、完成状況。 ○定期調査での結果。
	第1節 地形					
	第2節 気候					
	第3節 自然と生活					
	第4節 自然環境に関する諸問題	○世界の資源と産業等に関する分布やそれらの形成要因に着目し、系統地理的に考察する視点を設定して、それらと人間生活とのかかわりについて考察したか。 ○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野に留意してどのような地域に生起する傾向があるのか、どのような形成要因かを考察できたか。	○世界の資源と産業等に関する分布図や統計資料を活用し、分布の特色について分析する技能を身につけたか。 ○資源と産業等に関する統計資料から分布図を作成したり、グラフ等で表現したりする技能を身につけたか。	○世界の資源と産業等の空間的な規則性、傾向性、それらの形成要因等を系統地理的方法で捉える視点や方法を身につけたか。 ○世界の資源と産業等の分布や動向に関する基礎的・基本的知識や概念を習得できたか。 ○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野からみた地域性や形成要因を理解できたか。	○教室における授業の取り組み状況や発言等の学習状況。 ○世界の資源と産業に関する白地図、ワークブック等の作業結果、完成状況。 ○定期調査での結果。	
	第2章 資源と産業					
	第1節 農林水産業					
	第2節 資源・エネルギー					
	第3節 工業	○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野から捉える視点や方法を身につけようとしたか。 ○現代世界の資源・エネルギー、食料等に関する問題を積極的に理解しようとしたか。	○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野に留意してどのような地域に生起する傾向があるのか、どのような形成要因かを考察できたか。	○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野から捉える視点や方法を身につけようとしたか。 ○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野からみた地域性や形成要因を理解できたか。	○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野からみた地域性や形成要因を理解できたか。	○現代世界の資源・エネルギー、食料に関する問題について、世界的視野からみた地域性や形成要因を理解できたか。
	第4節 流通と消費					

※ Excel形式のデータは、弊社ウェブサイトよりダウンロードできます。科目全体の評価観点、第I編と第II編第3章以降の評価規準はウェブサイトをご覧ください。

新編詳解地理Bワークブック

- ① 教科書に準拠し、全分野・全地域を扱ったワークブック。
授業の整理だけでなく、センター試験演習にも有効。
- ② 内容整理(左頁)は、表形式の穴埋めで地理用語を整理。
左側の解答欄を活用して重要用語をしっかりと定着。
- ③ 読図(右頁)は、教科書掲載の図表を読み取りながら内容を把握。
さらに統計・主題図の読図技能を養う。
- ④ 問題(右頁)は、教科書での学習を整理・発展させる良問を完備。



B5判/96頁
定価：580円(5%税込)

左頁 内容整理

80 第7章 現代世界の地理的考察

■第2章 現代世界の諸地域 ■ 教科書p.250～256

第7節 EU—地域の統合に注目する(2)

1. 油田	4 鉱工業の変化
2. 発電	資源とエネルギー
3. 発電	伝統的な工業の中心
4. 発電	立地移動→
5. 発電	先導工業技術の発展
6. 語彙	5 言語からみた文化
7. 語彙	言語
8. 語彙	宗教
9. 語彙	6 都市と交通
10. 語彙	都市の発達と課題
11. 語彙	7 EU統合と地域変化
12. 語彙	8 EUの課題
13. 語彙	域内経済格差
14. 語彙	域内企業と市場保護
15. 語彙	
16. 語彙	
17. 語彙	
18. 語彙	
19. 語彙	
20. 語彙	
21. 語彙	
22. 語彙	
23. 語彙	
24. 語彙	
25. 語彙	
26. 語彙	
27. 語彙	
28. 語彙	
29. 語彙	
30. 語彙	

解答欄を活用して重要用語をおさえる

右頁 読図・問題・作業

第7章 EU 81

■問題1 教科書p.114図2「ヨーロッパの主要製鉄所の分布」とp.251図5「ヨーロッパの工業地域」をみて、次の図のA-Cの鉱山・炭田の名称と、①-④の都市名を記入しなさい。

鉱山・炭田

A 炭田
B 炭田
C 鉄山

新しい工業都市

①
②
③
④

■問題2 教科書p.252図1「ヨーロッパの言語」と図2「ヨーロッパの宗教」をみて、ヨーロッパの各国を言語と宗教によって分類した下の表の空欄①-⑥に適する国名を国名群から選んで記入しなさい。

言語	インドヨーロッパ語族			その他
	ゲルマン語派	ロマンス語派	スラブ語派	
プロテスタント	イギリス, オランダ			⑥
カトリック	①			③
東方正教			ロシア	ギリシャ
イスラム教			ボスニア・ヘルツェゴビナ	④

国名群

ポーランド	フィンランド	ハンガリー	ベルギー	スイス
オーストリア	ルーマニア	アルバニア		

■読図 教科書p.254図2「ヨーロッパの交通」をみて、下の文の空欄①-⑦に適する語句を記入しなさい。

EU各国は鉄道や内陸航路、高速道路が網のようにはりめぐらされている。ベルリン、パリ、ローマ、マドリードなどの各都市は、高速道路によって結ばれている。パリとロンドンには(① トンネル)をはしる(②)とよばれる鉄道やトンネルなどがある。それぞれは(③)とよばれる内陸航路として利用されている。それぞれの河川は(④)とよばれる川や支流と(⑤)とよばれる川を結ぶ(⑥)とよばれる川や支流の交流ライン川、EU域内の航空網の整備も進んでいる。ロンドンやパリのはが、オランダの(⑦)やドイツの(⑧)はハブ空港であり、EU域内・域外の移動を結びつける拠点となっている。

資料読図による重要事項の整理

①	トンネル	②	運河	③	運河
④		⑤		⑥	

学習の定着と大学受験への対応 統計資料・問題集

2012 データブック オブ・ザ・ワールド 2012年版 Vol.24

A5判・496頁
定価 680円 (5%税込)

最新の統計と各国要覧

地理統計要覧 2012年版 Vol.52

A5判・160頁
定価 420円 (5%税込)

最新の地理統計データ集

完全マスター 地理B問題集

B5判・本文136頁
別冊解答64頁
定価 840円 (5%税込)

センター・国公立大の良問を改変

地理B実践ワーク

B5判・本文160頁
別冊解答20頁
定価 780円 (5%税込)

すべての地理B教科書に対応



新編地理A

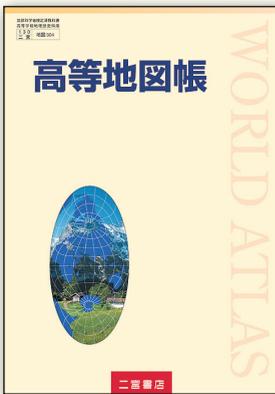
— ひろがる世界とつながる地域 —

130二宮 地A304

B5判 / 198頁 / 図表250点 / 写真400点
準拠教材:新編地理Aワークブック

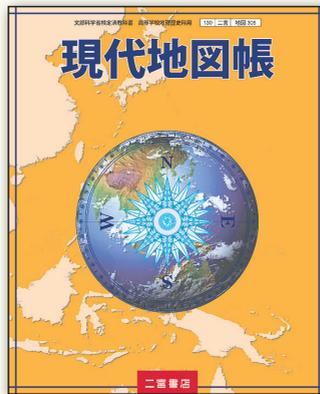
多彩な切り口で「基礎から楽しく学べる」教科書

本書『新編地理A』は、豊富な写真を使った多彩なテーマで、地理を基礎から楽しく学べる教科書です。従来の地理Aの内容のほかに防災学習や地形図学習などの内容も盛り込んでいます。また、生徒自らが自発的に学べるようなユニークな題材も取り上げました。



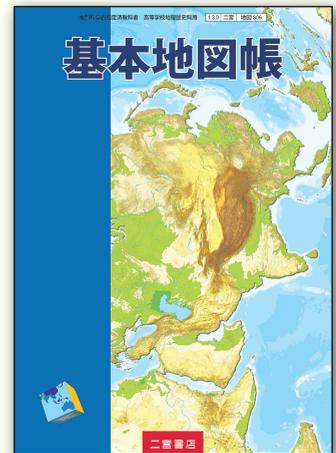
高等地図帳 地図304
B5判 / 144頁

広域図から拡大図まで
数多くの一般図を収録



現代地図帳 地図305
AB判 / 160頁

ワイドな AB 判を採用
一般図・主題図を大きく詳しく



基本地図帳 地図306 A4判
144頁

大きく、楽しく、地図を見る



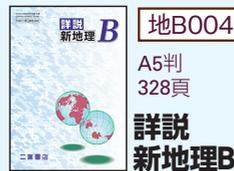
地A005
B5判
160頁

高校生の
新地理A



地A011
B5判
184頁

よくわかる
地理A
世界の現在と未来



地B004
A5判
328頁

詳説
新地理B



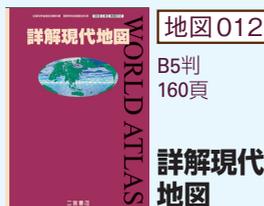
地B008
A5判
336頁

詳解地理B



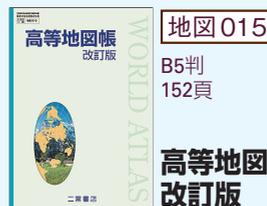
地図013
A4判
144頁

基本地図帳
改訂版
世界と日本のいまを知る



地図012
B5判
160頁

詳解現代
地図



地図015
B5判
152頁

高等地図帳
改訂版



地図016
A5判
240頁

コンパクト
地図帳
地図から学ぶ現代社会